日本選手権水泳競技大会飛込競技（平成１１年、１９９９年）　　ｈ３０，３，２７記

～鳥取大会を振り返って～　　鳥取県体育協会史に寄せて

平成１１年度８月６日から８日の三日間、米子市の東山水泳場で開催された。この大会は平成１０年に日本水泳連盟の来年度の競技日程計画で明記され、１１月に開かれた日本水泳連盟の評議委員会で正式決定された。日本選手権が地方で開催されたのは、これまでに石川、大阪でしかなく異例と言えば異例であった。地元関係者は「ぜひ大会を成功させたい。」と歓迎した。大会では男女の高飛び込み、１m飛び板飛び込み、３m飛び板飛び込みに国内トップ選手が日本一をかけた熱い戦いを繰り広げた。

この日本選手権は、日本室内選抜大会と並ぶ国内では最も権威ある大会である。次年度開催されるシドニーオリンピックを控えて各選手は気合い十分でハイレベルな戦いが期待されていた。

＜大会一日目＞

期待を一身に集め、登場したのが地元期待の星、宮本基一郎（鳥取スポーツセンター）であった。出場種目は男子１m飛び板飛び込みであった。結果は３１１．４６点で３年連続３度目の優勝を果たし、弟の宮本幸太郎（日本体育大学）も６位入賞を果たした。表彰台の一番高い位置に立った宮本選手は、ほっとした表情を浮かべながら「飛び出しのポイントが今ひとつ。どんな状況でも自分の飛び込みができなければ駄目だ。」と気を引き締めていた。さらに得点に関しては「３５０点は取らないと・・・・。」もう一つ高い段階つまり世界レベルを見据えているようであった。

また、女子３m飛び板飛び込みに出場した野中恵美（米子高校教員）は、予選は突破したものの準決勝で３３３．５７点決勝に駒を進めることはできなかった。

大会を盛り上げようとする地元関係者の熱意はすごいものがあり、さらにはスタンドにて観戦する人たちの声援もものすごいものがあった。宮本基選手は「地元で初めて飛び込み競技を見る人もいる。すごい演技を見せてあげたい。」と故郷の選手権開催に重圧を感じながら、毎日毎日スタンドから送られる声援を温かく感じ、かつ、何度も励まされたという。

＜大会二日目＞

男子３m飛板飛込には、やはり第一人者の寺内　健（ＪＳＳ宝塚）三年連続四回目の優勝を果たした。二位には宮本基一郎、五位には宮本幸太郎が食い込んだ。会心の演技をなかなか演技することができない宮本基一郎。波に乗れず全体的に上体に力が入りすぎた状態であった。そのため動きにスムーズさが欠けていたようであった。

＜大会三日目＞

いよいよ最終日、期待のできる高飛込が行われた。しかし、兄の基一郎選手は調子が上がらない。それに代わって出たのが、弟の幸太郎であった。幸太郎選手はかつて平成７年インターハイで優勝した際もこの東山水泳場であった。しかも、昨年のインカレ王者でもある。その幸太郎選手が二位に入賞した。まさにエースの争いに名乗りをあげた瞬間であった。期待された基一郎選手は結局九位で入賞を逃してしまった。また、女子１m飛板飛込では野中

恵美選手が七位に入賞し、昨年十位であった雪辱を果たした。

閉会式を迎えた。「ああ、やっと終わったな」という安堵感に包まれた。しかし、もう一つこの大会を呼んできた意義があった。それは、宮本基一郎が閉会式終了後、選手全体を回れ右させ、スタンドを埋める人々に「心温まる応援をありがとうございました。私たち選手は、これから一生懸命頑張ってまいりますので今後とも応援・ご声援よろしくお願いします。」という一言があった。こんな大会、見たことが無い。スタンド・選手・役員の一体感があり新鮮な空気が漂っていた。

その後、帰路に着く選手も多かったが、時間に余裕のある選手には残ってもらい、小中学生に飛び込み教室を、いくつかの班に分かれて実施していただいた。その様子を見ても心が通い合う大会であったといえよう。このようにほっとする大会であった。

大会期間中、米子市には監督会議で市民体育館をお借りした。東山合宿所もお借りしてサービスコーナーなる休憩所を開設した。そこでは、味噌汁、おにぎり、果物、お菓子、などが提供された。なかには出場チームあるいは個人で提供されたものもあった。大会開催を市にお願いする際、経済効果はそれほど期待はできないが教育効果は絶大なものがあることを説明した。それに耳をかしてくださった当時の米子市長、森田隆朝氏をはじめとする関係者の方々、鳥取県関係者の方々にあらためて頭が下がる思いである。

その一ヶ月後、くまとも国体で宮本幸太郎選手は高飛込で二位。野中恵美選手は飛板飛込で四位と見事に華を咲かせた。